

【研究ノート】

イギリス中世末期における地域的市場圏〔Ⅳ〕

—デヴォンシャーのばあいについて—

藤 田 重 行

Ⅲ 毛織物手工業の展開

(1) 毛織物手工業の発展

ここにおいて改めて十五世紀より十七・八世紀の交に至るまでのデヴォンにおける毛織物手工業の発展の跡を顧みることとする。しかし、エクセターを中心とする個別研究以外、デヴォンの地方都市の毛織物手工業に関する研究が未だ極めて少なく、仮令存在しても、いま容易に利用しうるものではないから、これまでに使用してきた文献や周知の史料に拠らざるをえない。尚、エクス川渓谷地帯へのカージイ生産の導入の時期について、ケアラス=ウィルソン、ホスキンス、スティーヴンス三者の間、とくにエクセターとデヴォンを研究の対象として知られる後二者の間に、著しい見解の相違があり、いまこのことについてかれらが述べるその時期のみをみると、ケアラス=ウィルソンは、明確とは言い難いが、概ね十五世紀中葉⁽¹⁾、ホスキンスは十五世紀末期⁽²⁾、そして、スティーヴンスは、1530年代と述べつつも⁽³⁾、ダズンとカージイの区別を必ずしも明確に行なっているとは言えない。このことは前項に掲げた表12・13においてもうかがえるところであるが、これらの表はスティーヴンスが史料の港湾記録 Port Book と関税記録 Customs' Book によって作成したものであるから、当時の港の役人や税関吏がそれらを識別する能力をもたなかったか、単に輸出商人の申告をそのまま記録に止めたにすぎなかったかの、いずれかであろうと思われる。これらの役人にとって重要なことは、種類ではなく、輸出する商品の量であったことが考えられるからである。さらに、やや立ち入ってみると、ケアラス=ウィルソンは、小冊子本文31ページの中世後期におけるエクセターに関する素描において述べているのであって、直接史料に拠っているのではない⁽⁴⁾。スティーヴンスは表12においてカージイをダズンに含めていて、このことは、かれの次のごとき記述からも、恰も当然のことであるかのごとき印象を受ける。「当面の時代(1625—88年——筆者)の初期には、エクセター、ティヴァートン、クレディトンおよびカロンプトンがカージイ生産地域の中心を形成した。粗いバーンスタープル・ベイズの生産は、トーリントンとバーンスタープルとの周辺に集中していた。そして、トーントン、ウェリントン、チャード地域においては、トーン

ン・コットンが主要なる生産物であった。しかしながら、これらの毛織物のうち支配したのは、デヴォンシャー・カージイあるいは"デヴォンシャー・ダズン"であった。この毛織物はおそらく1530年ころに現われ、そして、十六世紀の間にデヴォンにおいてブロードクロスにおき代わった。……」⁽⁵⁾ (下線筆者) かれは R. P. チョープなる者が書いた当時の毛織物検査官の記述に拠っているのであり⁽⁶⁾、文中のカージイとダズンの言い換えは、かれ自身の述べているところである。従って、かれのばあいには、とくにデヴォンシャー・ダズンと称される毛織物は、それまでのダズンとは異なり、カージイの特色を有する毛織物、それ故に、デヴォンシャー・カージイと同一視しているごとくに想定される。元来カージイは、その発祥の村名をとって名付けられたサフォークのカージイやヨークシャーのウェスト・ライディングで興ったカージイとデヴォンのカージイとは決して同一の型の毛織物ではなく⁽⁷⁾、いずれもそれぞれの地域の伝統的織物の特色を多かれ少なかれ遺しているものであって、デヴォンのカージイはおそらくダズンの特色を幾分か有する毛織物であったのであろう。かれよりも一世代以上早く導入されたとみるホスキンスは、後代のサージ・メイカーである M. ダンスフォード Martin Dunsford なる者が遺した「ティヴァートンの歴史的回顧録」に拠っていると推定され、工業史に関しては、かれが普通以上に信頼しうる権威であるとして、その記述に従っていると思われる⁽⁸⁾。いまこれら三者の見解の相違に結着をつけることは、決して容易なることではないが、十五世紀末期からほぼ一世代の間にエクセターが急激に発展したことを考えると、エクセターとその背後地^{ヒンターランド}における主要産業である伝統的なる毛織物生産の単なる発展ではなく、変化があったことが推定され、それ故に、当面ホスキンスの見解に従うこととする。

それはとにかく、ここで改めて十三世紀まで溯ってみると、元来デヴォン産の羊毛は粗悪であり、一般に粗毛織物ストレイツを生産していたのであるが、表8によって知られるごとく、十三世紀中葉から十四世紀の間に、すでに15基の縮絨ミルが記録されていたのであるから、近隣の需要に応じてある程度のブロードクロスやストレイツ、その他の粗い刷毛織物^{ワール}を生産していたことが推定される。ホスキンスによれば、既述のごとく、トトネスのランセットが早くより知られており、すでに1253年のころに納戸所 wardrobe によって王のベット・カヴァー用に買い上げられていたと言⁽⁹⁾。そして、かれは、黒死病のときまで、デヴォンの大部分の小都市や若干の村々が当時の毛織物手工業の中心であって、その後〈黒死病〉の災害から回復するのに相当長期を要したとみられているが、十四世紀末期までに、しだいにより良質のダズンの生産がデヴォンの東部において拡がりつつあったものごとく、1394・5年の毛織物検査官の報告によれば、毛織物商 drapers 75名がダズン 6,738 反を取り扱っていたことが知られ、これをクロスに換算して計 1,684 ½ クロスのうち 615 クロスすなわち三分の一以上をバーンスタブルの指導的商人 3 名が扱い、他方、エクセターの商人たちが計 707 クロスについて特別税を納めていたと言われ、そこがすでにデヴォンの最も重要な生産と取引の中心として発展しつつあったことを示している。しかし、巨商とも称すべき大

商人はそこには未だ出現していなかったものごとく、ホスキンズはカルムストック Culmstock の一毛織物商が単独で90クロスを扱っている者を、州内第4位の大商人であったと推定している⁽¹⁰⁾。また、このころの毛織物手工業の回復・拡大を物語る事実として、少量ながらも輸出を行っていたことに注目し、それらが主としてガスコーニュ、ブルターニュおよびスペインに送られていたとみなしている。当時の毛織物生産の中心は、エクセターとその周辺以外に、バーンスタブルを含むブローントン Braunton とシャーウィル Shirwill 2郡に集中しつつあったと言われる。その後十五世紀前期に、ダズンの生産がいっそう州の東部と東南部へ拡大したが、既述のごとく、バラ戦争の勃発によるフランス市場の喪失によって、著しい不況を経験し、バラ戦争中の毛織物検査官の報告によれば、1467—78年間の販売に供された毛織物の数量は、1394—99年に比較して、年平均半ば以下に減じていた。しかし、1475年のエドワード四世の敗戦とこれに続くフランスとの休戦条約によって、その市場を回復しうることとなり、1480年以降輸出が急増し、それに照応して毛織物の生産の著しい発展をみた。ホスキンズによれば、デヴォンにおけるこの回復・発展をいっそう促進したものが、十五世紀末期におけるカージイ生産の導入であったと云うのである⁽¹¹⁾。

それはとにかく、この発展の結果、これに使用された原料羊毛が不足し始めたものごとく、海外からの輸入によって補わざるをえなくなった。かくして、既述のティヴァートンのJ・グリーンウェイのごときは、この貿易によって一代にして大資産を築いたと言われる。かれは専らダートマスを通じて貿易を行っており、同港の関税報告によれば、輸出の大部分が刷毛織物、そして、その多くが染色して仕上げたカージイであり、加えて若干の錫と皮革を積み出していた。さらに、かれの貿易活動が拡大するに従って、輸入品が多様化し、羊毛のみならずぶどう酒、大青、塩、蜂蜜、乾燥果実、鉄、リネンおよびキャンヴァスを、おそらく低地諸地方から、洋紅とホップのごとき他の雑多なる商品とともに、輸入していた。かれはこれらの貿易においてイギリス船のみならず外国船をも使用し、さらに、かれ自身船の所有主であり、1498年からかれが死亡した1529年までの関税報告によって、かれもしくは同名の息子が船3隻(各船名—the George Greenway, the Trinity Greenway, the Charity Greenway)を所有していたことが知られている⁽¹²⁾。かくのごとき商人の出現は決して例外ではなく、毛織物生産の中心の一つとして十五世紀末期にティヴァートンと競いつつあったカロンプトンの指導的商人J・レイン John Lane は、エクセターを通じて貿易を営む商人であるとともに毛織物製造業者であり、エクセターのW・クラッグ W. Crugge, クレディトンのノースコート家 the Northcotes とデイヴィス家 the Davies, その他ニュートン・セント・サイアーズ Newton St. Cyres, トトネス, シルストン Shilston 等においても、著しい商人が出現していたのである⁽¹³⁾。

周知のごとく、十六世紀前期は中世後期における毛織物手工業の最も繁栄した時代であり、十五

世紀以来いっそう農村諸地域に拡大して、毛織物生産諸州における都市の衰退を惹き起こしたときであって、その結果が1554年の「特権都市保護法」⁽¹⁴⁾やその翌年の「織布職条令」⁽¹⁵⁾の発布となって現われているのであるが、その効果は殆んど期待し難いものであった。それより王国全体にとっていっそう重大なる影響を与えた問題は、やがて勃発したオランダ独立戦争である。

それはとにかく、ヘンリ七世と同八世の治世の王国の諸港からの毛織物輸出関税の数字は、言うまでもなく、輸出量のみを示しているものであるが、ホスキンスはこれをデヴォンにおける毛織物手工業の重要性についてえられる最も信頼しうるものとみて、まず、1485年と1509年の間に、ロンドンとその外港であるサウザンプトン Southampton との合計が全国の毛織物輸出関税総額の三分の二以上を占め、ニューカースル Newcastle とブリストルが地方の諸港中指導的なる港であり、エクセターは、ダートマスを加えると、ブリストルに迫り、さらに、これにプリマスとコーンウォールのフォウエイ Forwey を含めると、ブリストルを凌いでいたと述べている⁽¹⁶⁾。さらに、同じ期間のブリストルの毛織物関税年平均額が1,273ポンドであったのに対して、全体としてのデヴォン諸港のそれは1,624ポンドであった。その後ヘンリ八世の治世の間に、毛織物輸出がますますロンドンに集中しつつあったために、デヴォン諸港の毛織物関税年平均総額が1,489ポンドに低下し、ブリストルの同平均額も減少した。そこで、デヴォン諸港がロンドンとサウザンプトンに続き、地方における毛織物輸出港の最も重要なグループを形成するに至った。1485—1547年の毛織物輸出関税を全体としてみれば、ロンドンが圧倒的に多く、デヴォン諸港からの輸出関税は約6パーセントを占めるにすぎなかった⁽¹⁷⁾。しかし、このことは決して当時のデヴォンの毛織物生産の実態を示すものではなく、上述のごとく、この時期に毛織物とくにブロードクロスとサフォークのカージイの輸出がロンドンに集中しつつあったことと、染色と仕上げ工程において発達していたロンドンへ地方から未完成の毛織物が送られてきて、その完成品の一半が輸出されたことによるものである。但しブロードクロスは未完成品のままで大陸最大の毛織物市場アントウェルペンへ輸出されたことは、周知のごとくである。要するに、上述のごとき毛織物輸出関税の動きは、毛織物生産諸州におけるデヴォンの地位の相対的上昇を示唆するに止まると言える。それよりもむしろ既述の1524・5年の〈特別税〉付課のときにおける毛織物の生産と取引の中心としてのエクセターとトトネスの上位主要都市への躍進が、仮令その一部分とは言え、急激に発展を遂げつつあった当時の毛織物生産州としてのデヴォンの成長の一端を示すものと言わなければならない。

ところで、このデヴォンにおける毛織物手工業の発展は主としてカージイ生産の拡大によるのであるが、他方、早くより行なわれていた粗い毛織物ストレイツの生産は、いまやダートムーアの西側に限られ⁽¹⁸⁾、その最も主要なる中心がタヴィストックであり、小農や小生産者たちの平常着か労働着の素材のごときものであるから、地域の需要を充足する以上に発展することは困難であったと思われる。さらに、デヴォン東部におけるより良質のダズンの生産の拡大・発展、続くカージイ

の生産の導入によって、長く逡息状態にあったのであるが、表13・14において見られるごとく、1630年代に入って、大西洋諸島に海外市場を見だし回復しつつあったことが知られる。

ところで、デヴォンを屈指の毛織物生産州の一つとしたものは、既述のオランダ独立戦争を契機とするいわゆる〈新呉服〉‘new drapery’の導入であり、スティーヴンスの記述にあるバーンスタープル・ベイズもその一つであるが、表12・13において見られるサージ＝パーペテュアナ（それらの長く着られることによってかく称せられた——ホスキンス）生産の拡大・発展によって、デヴォンの名声が著しく高められることとなったのである⁽¹⁹⁾。元来〈新呉服〉の導入は、対岸のスペイン領低地地方におけるアルバ公 Duque de Fernande Alvarez の新教徒に対する圧迫が厳しく、ついには北部七州の独立戦争に発展して、その結果、1567年以降フランドルンから多数の手工業者が北部へ逃避し、その一部が1560年代末から1570年代に相次いで亡命し来たり、かれらが新たな型^{タイプ}の梳毛織物^{ワーステッド}の技術を伝えたことに始まったのである。イングランドは、この戦争によって、ヨーロッパ最大の毛織物市場アントウェルペンを失ったのであるから、政府はかれらの到来を歓迎し、ノリッジ、コルチェスター、キャンタベリ、その他東部と南部の若干の都市に定着したかれらから、まず地元の手工業者がその技術を学び、その後しだいに西部や北部へ拡大することとなった⁽²⁰⁾。〈新呉服〉は手工業者の年季奉公制 apprenticeship を管理する一般的規制を免れており、毛織物検査官の調査と課税の対象からも1593年まで除かれていたことが⁽²¹⁾、この拡大を助けたことは誤りない。しかし、伝統的な刷毛織物^{ワール}の生産の回復にも努め、そのため大陸の取引市場を転々と移動させつつある程度の成果を挙げ、とくにブロードクロスの生産の回復と輸出が1614年に一つの頂点に達したことは、周知の事実である。しかし、その年ロンドンの市参事会員J・コケイン John Cockayn によって主張されたブロードクロスの完成品を輸出するカンパニ創設のプランが結局失敗に帰して、海外の市場を失うこととなり、その後この打撃から立ち直ることが容易ではなく、未完成品のブロードクロスの輸出が再び1614年の水準に達することはなかった⁽²²⁾。

それはとにかく、デヴォンの毛織物手工業は、主たる市場がフランスにあったために、既述の戦争の影響を受けることが比較的少なかった。その結果、〈新呉服〉がここに伝えられるのが遅れて、ようやく十六世紀末期のことであり、それが既述のバーンスタープル・ベイズである。その後十七世紀に入ってエクセターを中心とする周辺部において、サージ＝パーペテュアナがつくられ始め、しだいに拡がったが、西方のノース・トートン North Tawton から東北方のコトゥンの産地トートンに延びるベルト地帯で囲まれたところにしばらく限られていたものごとく⁽²³⁾、その外側においては、他の毛織物、とり分けカージイの生産が依然優位を保ち、ティヴァートンと、上述のベルト地帯内ではあるが、クレディトンとが、この生産に特化していて、とくにティヴァートン・カージイの名が当時全国的に知られ、このころにはそこにおいて縮絨・染色して仕上げた織物を、主として輸出のために陸運によってロンドンへ送っていた。デヴォン全体の中において当時大織元

の中の最も顕著なる者として知られるP・ブランデル Peter Blundell が、貧困より身を興して、最後に4万ポンドの資産を遺したことが伝えられている。多くの者が尚カージイの生産に執着していた理由は、その貿易がとくに有利であったことによるものごとく、M・ダンスフォードはカージイ貿易の利潤を100パーセント弱と計算しているほどである。これに多少の誇張があったとしても、事実この貿易によって商人が数年にして資産を築き、かれらの中に比較的若くして隠退してジェトリ化する者が稀れではなかったことによっても、その実態を推定しうるものごとくである⁽²⁴⁾。1620年代には、既述のごとく、エクセターを中心として、スペイン織が生産され始め、表13が示すごとく、1630年代には地域の需要を充足するのみならず、かなりの輸出が行なわれていた。他方、かつて毛織物手工業都市として名を馳せたトトネスとその周辺部においては、依然他のところにおいて生産されることのなかった narrow-pin-white (かつてのラシット類似の毛織物か?—筆者) と称する一種の粗毛織物を生産し続けていたが、しだいに衰えて、やがて〈市民革命〉の内乱期に、その地位と名声に終止符を打たれることとなった。また、デヴォン西部タヴィストックを中心として生産されていた粗毛織物ストレイツの生産が長らく逼息状態にあったが、いまやフランスと大西洋諸島に新たな市場を見出だして回復・発展を遂げつつあったように見える⁽²⁵⁾。

しかし、1620年代と1630年代の疫病の流行と戦争の影響は、単に貿易の局面に止まらず、生産そのものに及ぶものであるが、ある程度前項において述べたところであるから、ここにおいて繰り返す必要はあるまい。それよりはむしろ1640年代に入って〈市民革命〉が始まり、最初の王党派と議会派の熾烈なる内乱期である1642—6年の間に、デヴォンがしばしば戦場となり、人々が軍隊のみならずコーンウォール人の掠奪を蒙り、同州の毛織物手工業が破壊されて、多大の被害を受けていたことに注目しなければならない。州都エクセターにおいても、その間に占領軍が変わり、はじめ市民は掠奪と非道なる仕打を受け、家屋の破壊に止まらず郊外まで焼き払われた⁽²⁶⁾。1646年4月によりやく解放されて、その後この荒廃の中から、エクセターのみならずデヴォン全体が、むしろいかに速やかに回復しつつあったかを、表17⁽²⁷⁾によって見るべきであろう。また、この表が示すごとく、サージ=パーペテュアナの生産が圧倒的に多く、これにベイズを加えると、〈新呉服〉の生産がもはやデヴォンの主要なる毛織物手工業の商品であったことが知られる。この傾向はすでに1639年ころから現われていたものごとく、当時のデヴォンの治安判事たちが、「サージの生産が現在この地方の主要なるもの」⁽²⁸⁾ であると述べていたと言われる。

他方、表14と表17との比較によって、毛織物の商品市場として低地地方が著しく重要性を増し、いまやフランス市場に近づきつつあったことが知られる。そして、そこへの輸出の主要なる担い手は、当時の〈反独占運動〉の影響の下に、もはや冒険商人ではなく、輩出しつつあったいわゆる〈自由なる商人〉‘free merchants’ であり、このことは、フランス市場に対するフランス・カンパ

表 17 Main types of cloth exported to chief markets in 1647

Market	Type of cloth	Perpetuanas	Devon dozens	Taunton cotton	Barnstaple bays (single)	Barnstaple bays	Spanish cloth	Serge (single)	Serge	Straits	total subsidy
France	*	3813	379	824	88	535	22	180	2991	2982	
	**	477	32	41	9	?	5	13	449	166	1192
Netherlands	*	2244	1688	36	129	101	1523	1958	1134	—	
	**	280	141	2	13	?	381	132	170	—	1119
Spain	*	144	—	—	59	336	—	—	—	120	
	**	18	—	—	6	?	—	—	—	7	31
Atlantic Ilands	*	35	21	—	—	78	5	254	52	611	
	**	4	2	—	—	?	1	19	8	32	66
Total	*	6236	2088	860	276	1050	1550	2192	4177	3722	
	**	779	175	43	28	?	387	164	627	205	2048

* number of pieces.

** customs' subsidy, to nearest £.

ニの統制力の施緩にも現われていた⁽²⁹⁾。

それはとにかく、長期的に見れば、毛織物の生産の回復・発展と輸出の増加は、良質の原料羊毛の不足を意味する。とくにサージ=パーペテュアナの生産が発展するに従って、縦糸に要する長い繊維の羊毛を、専ら海外からの輸入に俟たなければならず、横糸用の短い繊維の羊毛も、地元産の羊毛では不足し、他州からの補給を受けなければならなくなっている。すでにダズンの生産においても、十五世紀のティヴァートンの商人J・グリーンウェイのごとく、かなりの量の羊毛を海外から輸入していた例が認められるが、その後カージイ生産の発展においては、フーカーが言うごとく、概ね「カージイが大部分この地方で産する羊毛よりつくられていた」のであろう。しかし、1630年にT・ウェストコート Thomas Westcote が、サージ=パーペテュアナ生産の発展を述べるとともに、以前にカージイ生産に充分足りた地域の羊毛が、コーンウォール、ドーセット、グロスター、ウースター、ウォーリック、ウェイルズ、アイルランドおよびロンドンからさえ補給を受けていたと言う。事実バーンスタープルとバイドフォードが1620年代にウェイルズの羊毛を輸入しており、エクセターと北部デヴォンの諸港のスペインとアイルランドからの羊毛の輸入が、世紀が進むに従って、増加し、南岸のライ Rye、フォークストーン Folkstone およびロンドンからの船積みも増しつつあった⁽³⁰⁾。1630年代に入ってサージ=パーペテュアナの生産が拡大したときには、いっそうアイルランドからの輸入が増え、1636年にはバーンスタープルとバイドフォードにアイルランドの羊毛 207,760 ポンドとスペインの羊毛 46,676 ポンドが輸入されており、翌1637年にはソマーセットのマインヘッド Minehead を通じて、アイルランドの羊毛の総輸出量 3,346,969 ポンドのほぼ三分之一に当たる 1,087,408 ポンドを輸入していた⁽³¹⁾。当時短い繊維の羊毛一包 (840 ポンド)

を織物に生産するのに週63名の人手を要したのに対して、サージ=パーペテュアナを生産する長い繊維の羊毛一包は、染色職を除いて、週202名の者たちにしごとを与えたと言われるから⁽³²⁾、仮令この数字にかなりの誇張があったとしても、サージ=パーペテュアナ生産の発展が当時のデヴォンにおける毛織物生産に活気を与えるものであったことには誤りない。このことは、表17によって見られるごとく、すでに〈新呉服〉が主要なる生産物となっていたことによっても、充分想定されうるところである。

しかし、この発展はその後決して順調に継続することはなかった。多事多難なる革命期と共和制期に加えて、その前後の疫病の伝播、王政復古後の戦争の頻発によって、妨げられることが少なくなかったのである。すなわち、1646年ブリストルからバイドフォードへ上陸した疫病が1650年までの間に全州に蔓延して多大の被害を蒙り、1649年のチャールズ一世の処刑が大陸諸国に衝戟を与えて、一年間フランス市場から閉め出され⁽³³⁾、さらに、1651年の第一回航海条令の発布に端を発する翌年に始まる第一次対オランダ戦争、1656年の対スペイン戦争⁽³⁴⁾、1665—7年の第二次対オランダ戦争、その間のオランダと同盟関係にあったフランスの1666年における対イギリス宣戦布告等相次ぎ⁽³⁵⁾、当時の重要なる貿易相手国と戦ったのであるから、デヴォンの毛織物生産の拡大も期待しうるべくもなかった。1647年と1666年の間には、なんらの港湾記録も残存していないと言われるが、いま1624年から1686年までのエクセターからパーペテュアナとサージの名目別で輸出された

表 18 Exports of serge from Exeter (in pieces)

year	perpetuana=serge	serge
1624	9,521	497
1636	4,608	341
1638	6,752	827
1647	6,266	6,759
1666	10,229	—
1676	87,149	—
1680	119,113	—
1683	110,745	—
1686	114,959	—

量（反単位）を見ると、表18⁽³⁶⁾の示すごとくである。この表によれば、1666年のサージの輸出量が1647年の輸出総量より2,796反、率にして20%以上減じていたことが知られ、上述のことがらの影響をよく現わしている。この1666年の輸出は、王の命によりイギリスの船舶がいかなる外国の港への出航も禁ぜられていて、専ら外国船によって行なわれていたものである⁽³⁷⁾。しかし、その後10年間のサージ=パーペテュアナの生産の回復・発展は著しかったものごとく、その他の主要なる毛織物生産諸州の動向もまた、同様であったようである。このことは、1670年まで拡大を続けていたオランダの毛織物手工業が、イギリスの競争力の回復とともに、急激に衰退したことによって⁽³⁸⁾、よく示されている。

ところで、このデヴォンにおける回復・発展は、決して順調に行なわれたのではなかった。とくにエクセター近隣においては、1663—70年にミル所有者G・ブラウニング George Browning なる者の活動によって、著しく妨げられた。かれが運河へ河水を導き入れるために築かれたトリューの堰近くにミルを建設したために、運河に流入する水量が減じたのみならず、ときおり堰が破損し、

河岸の破壊するところさえ生じた⁽³⁹⁾。要するに、運河の効用が著しく損われたということである。その結果、多くの毛織物の荷がトプサムまで陸運によらざるをえなくなり、それだけエクセターの関税収入が減ることとなった。これに対する糊塗策を度々講じていたが、運河そのものも老朽化していて効がなく、結局1676年に至って3,000ポンドの多額の金を支出して、抜本的なる改修を行なった⁽⁴⁰⁾。その間の1672—4年の第三次対オランダ戦争による短期の不況を経験したが、表19⁽⁴¹⁾・20⁽⁴²⁾が示すごとく、これよりエクセターからの毛織物、とり分けサージ=パーペテュアナの輸出が急増し、その主たる市場がフランスと低地地方、とくに1670年代に入って後者にあったことが知られる。このフランス市場の後退は、エクセターからの直接の輸出が減じたということであって、必ずしもデヴォン産のサージ=パーペテュアナのフランスへの輸出が減少したことを意味しない。いかなる理由によるかは明らかではないが、フランス市場へ輸出するのにロンドンの商人の方がよりよき地位にあったもののごとく、エクセターからロンドンへ沿岸航路によって送り出されたサージ=パーペテュアナの多くが、そこから再輸出されていたのである⁽⁴³⁾。それにしても、低地

表 19 Exports of main types of cloth (in pieces) from Exeter, 1666-86

	1666	1676	1680	1683	1686
Perpetuanas	10, 229	87, 149	119, 133	110, 745	114, 959
Bays (single)	1, 338	1, 599	1, 307	1, 124	2, 129
Bays (coarse)	791	2, 146	1, 188	1, 850	978
Cottons (mostly Taunton)	190	629	848	282	23
Broads (various sizes)	0	863	522	212	383
Kerseys	68	45	538	127	64
Spanish Cloth	454	0	294	202	0
Dunsters	109	366	259	77	38
Devon Dozens	220	121	239	189	495
Somerset & Dorset Dozens	99	87	29	0	36
Straits	140	18	0	22	0

表 20 Exports of perpetuanas from Exeter (in lb. weight)

	1666	1676	1680	1683	1686
France	64, 559	147, 599	152, 455	110, 628	87, 146
Netherlands	49, 056	1, 002, 242	1, 564, 058	1, 457, 653	1, 163, 555
Spain	16, 072	55, 339	40, 865	25, 936	31, 012
Portugal	8, 629	25, 763	7, 616	28, 031	14, 927
Atlantic Islands	1, 976	3, 717	382	1, 854	2, 811
America, Barbados and Jamaica	248	2, 653	5, 234	5, 186	7, 645
the others	12, 895	69, 926	16, 379	31, 891	411, 881*
Total	153, 435	1, 307, 239	1, 786, 989	1, 661, 179	1, 718, 977
(Equivalent in pieces)	10, 229	87, 149	119, 133	110, 745	114, 959

* この数量が多いのは、この年バルト海地方への輸出が異常に多かったことによる。

地方の市場の成長が際立って著しく、エクセターから輸出されたサージ＝パーペテュアナは、1676年に76%、1680年と1683年の間に88%、そして、1686年のフランス貿易の復活とバルト海地方の市場の急激なる拡大のときにおいても、68%を占めていた⁽⁴⁴⁾。この低地地方の市場の発展は、既述のオランダのサージ生産の衰退の直接の結果であるが、基本的にはイギリス国内における〈新呉服〉に対する需要の増大に支えられた生産の拡大・発展によるものである。例えば、1688年に生産されたサージ、パーペテュアナ、セイズ says およびスタッフ stuff のほぼ43%が国内において消費されたと言われる⁽⁴⁵⁾。仮令多少の誇張があったとしても、当時の状態をよく示唆するものと見て誤りあるまい。この国内市場の成長は、デヴォンのばあい、1680年代に大量のサージ＝パーペテュアナがロンドンおよび南岸の諸港に積み出されていることによって、容易に推定される。例えば、1680年にエクセターからプリマスとロンドンの2港だけでフランスへの輸出とほぼ同量のものが積み出され、1683年にはすべての同港の海外市場へ輸出されたものと同量がロンドンを含む沿岸諸港へ送り出されたと言われる⁽⁴⁶⁾。もちろんそれらのすべてが国内で消費されたのではなく、とり分けロンドンから再輸出されたものが少なくなかったと思われるが、そのころのロndonは、郊外を含めると、全国の人口のほぼ10%が集中するそれ自体一大消費市場であった。いまエクセターからイギリスの諸港へ航行する船舶についてみると、例えば、1683年に出発した74隻のうち37隻がロンドン、14隻がプリマス、残る23隻がその他の10港へ航行したことが⁽⁴⁷⁾知られている。尚同じころロンドンからアフリカへのサージの輸出が激増しており、1683—86年の間にアフリカ・カンパニが年平均39,000反を輸出していたと言われているが⁽⁴⁸⁾、その中にデヴォン産のサージ＝パーペテュアナがどの程度含まれていたかは、明らかではない。また、同時代の一報告書が、エクセターにおいて生産された大量のサージ＝パーペテュアナによって、ロンドンに週1万ポンド(単位重量)を齎らすエクセターとロンドンおよび同国の他の諸港との日常的取引について述べている⁽⁴⁹⁾。表21⁽⁵⁰⁾が示すごとく、1680年以後ロンドンへの輸出が増し、とくに1681年以後には大部分がロンドンへ積み出されていたことが知られる。このことは、サージ＝パーペテュアナの生産の拡大・発展に伴って、ロンドンまでの陸運の定期便によって送り出されていた荷の一半が、おそらく既述の運河の改修後海運に切り変えられたことを現わしていると考えられる。

それはとにかく、以上のごとき1680年代の発展を阻止したものは、1689年のフランスとの戦争の勃発と、その後相次いでヨーロッパ諸国の間で繰り返行なわれた一連の戦である。イギリスも度々これに捲き込まれざるをえず、そのために、多くの市場を失い、エクセターおよびその背後地^{ヒンターランド}における毛織物の生産が急激に衰退した。このことは、エクセターのこの年の関税収入が、1687年に比較して、39%に低下し、さらに翌1690年には29%にまで減少したことによく現われている⁽⁵¹⁾。しかし、やがて急速に立ち直りつつあったものごとく、依然その生産と取引の中心であるエクセターが、1680年代にアイルランドの羊毛を、バーンスタープルとバイドフォードの合計とほぼ同

表 21 Coastal shipments of perpetuanas and serges from Exeter, 1672-88

year	Serge and Perpetuanas (in lbs.)	Remarks
1664	105	—
1672	435	—
1673	75	—
1674	9,075	8,775 to Plymouth
1675	3,845	2,865 to Rye
1676	32,204	28,859 to Dover
1677	35,518	33,842 to Dover ; 1,676 to Plymouth
1679	67,245	64,260 to Plymouth ; 1,800 to London
1680	110,510	69,960 to Plymouth ; 40,325 to London
1681	637,860	571,155 to London ; 66,705 to Plymouth
1683	1,730,385	1,565,400 to London ; 57,780 to Plymouth ; 67,545 to Portsmouth ; 30,525 to Cowes
1685	779,905	673,575 to London ; 6,150 to Plymouth
1686	1,625,595	1,603,290 to London ; 22,303 to Plymouth
1687	1,755,870	1,736,970 to London ; 18,900 to Plymouth
1688	1,322,700	1,314,300 to London ; 6,750 to Plymouth

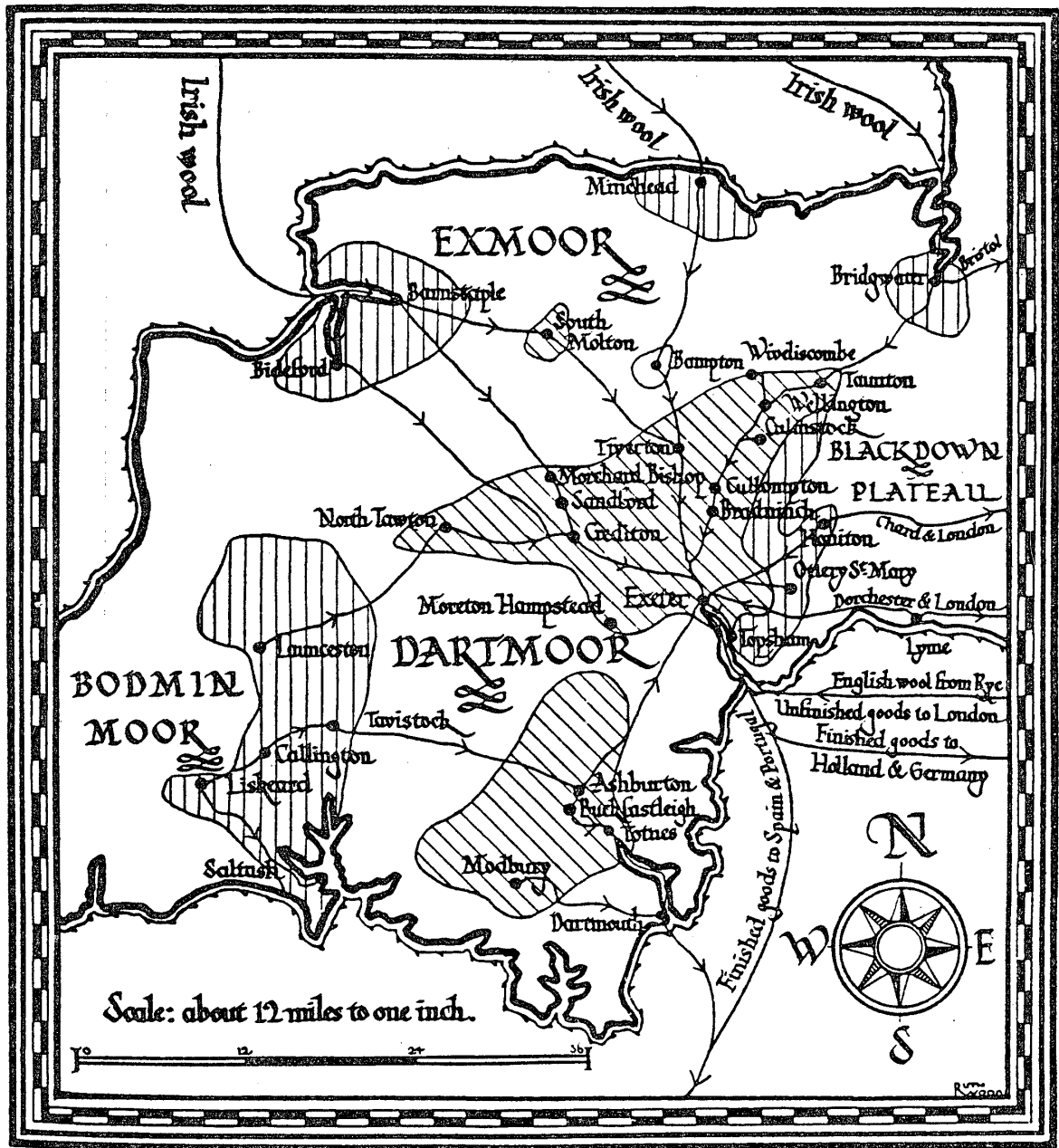
量のアイルランドの総輸出量の20%を輸入し、その周辺と背後^{ヒンターランド}地へ供給していた。そして、その後1692年までのアイルランドの羊毛の輸入量は年価値4万ポンドを越えていたと言われている⁽⁵²⁾。以上のごとき毛織物手工業の回復・発展とともに、エクセターにおいて染色工業が発達して、〈新呉服〉を輸出する以前に、ここにおいて染色して仕上げられたのである。そこで、スティーヴンスは、これに必要な燃料として王政復古後しだいに石炭が使用されていたことに着目し、C・ファイインズ Celia Fiennes が染色鍋を熱するためのみならず、熱してプレスをするためにも、窯に石炭を使用したと述べていることに言及して、当時増大しつつあったニューカースル Newcastle からの石炭の輸入の少なからざる量がこれに消費されたことを、推定している⁽⁵³⁾。

ところで、それまでに縦糸用の原料羊毛の主要なる供給地アイルランドにおいても、〈新呉服〉生産の技術が伝えられて、1666年にサージ=パーペテュアナ 9,000 ポンド (単位重量) を輸入して

表 22 Export of Serges from Exeter, showing the Direction of Trade, 1700 to 1750 (Figures in fooo's)




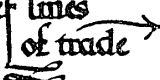
Direction Year	Holland	Spain	Portugal	Germany	Flanders	Italy	Total
1700	262	49	17	65	—	—	392
1710	386	12	37	28	—	—	463
1721	111	8	22	59	—	—	200
1730	109	26	—	99	—	—	234
1740	116	—	—	123	—	—	239
1750	125	30	24	144	13	44	413

付 図



The South-Western Sarge Industry in 1700

Showing the chief trading routes by sea and by land, the chief centres of industry, & the relation between the spinning & the weaving districts.

Spinning districts 
 Weaving districts 
 Woolen towns 
 Chief lines of trade 

いたが、その前年に〈新呉服〉244反、フリーズ freeze 444,381ヤードを生産しており、1687年には〈新呉服〉11,360反、フリーズ1,129,716ヤードを生産しうるまでに発展し、デヴォンや西部地方の〈新呉服〉の商品市場としてのアイルランドを失うこととなった⁽⁵⁴⁾。しかし、既述のごとき急速なる発展途上にあった当時のデヴォンにとっては、とくに著しい影響を受けることはなかったように見える。

デヴォンにおける1690年以降のサージ=パーペテュアナ生産の発展は、表22⁽⁵⁵⁾によってもその趨勢を推定しえられるごとく、海外市場の変化（スペインに代わる低地地方へのいっそうの増加とドイツへの直接の進出）によるところが多く、その基礎にはデヴォンにおけるサージ=パーペテュアナ生産地域の拡大が見られた。十五世紀末期以来カージイの生産に特化していたティヴァートンにおいて、1690年ごろに初めてオランダ市場のために、サージ=パーペテュアナが生産され、そして、それより20年以内に完全にカージイの生産を放棄していたことが、ダンスフォードによって伝えられ⁽⁵⁶⁾、また、デヴォン西部のタヴィストックにおいてさえ、旧来の粗毛織物の生産を続けてはいたが、十八世紀までにかなりのサージ=パーペテュアナを生産するようになったと言われる⁽⁵⁷⁾。

表22は1710年代までおそらくここにおけるサージ=パーペテュアナの生産が一つのピークに達していたことを示している。ホスキンスは、付図⁽⁵⁸⁾においてみられるごとく、1700年にすでに生産工程の地域的特化の著しかったことを指摘している。要するに、デヴォンの大部分とソマーセット西部およびコーンウォール東部が、この生産に多かれ少なかれ関わりをもち、地域的に生産工程別（紡毛、織布）に特化していることが認められるということであり、縮絨、染色および仕上げ工程が都市（とり分けエクセター、ティヴァートン）に集中しているごとくに見るのである。

いまこれ以上この発展の跡を辿る必要はあるまい。課題の地域的市場圏の観点より見れば、サージ=パーペテュアナの生産の拡大に伴って、横糸に使用する短い繊維の羊毛をミドラングスの南部諸州および南部地方の諸州からの移入によって補い、かつ、地元のみならず南部地方を主とする国内市場に支えられて発展しえたのであり、デヴォンを中心とする西南半島部の地域的市場圏としての統一性が1620年代か遅くとも1630年代には打ち破られていたと考えられるからである。それよりもむしろ十五世紀末期以後の毛織物手工業の構造の推移を、項を改めて見なければならぬ。

- (1) Carus-Wilson, *Ibid.*, p. 8. ここにおいては、脚注の Ph. Wolff, *English Cloth in Toulouse (1380-1450)*, *Economic History Review* 2nd Series, II (1950), 290ページ以下の記述に主として拠っていて、カージイ導入の時期について必ずしも明確に述べているとは言えないが、前後の文脈より見て十五世紀中葉とみなしていたように解される。
- (2) Hoskins, *Devon*, p. 125.
- (3) Stephens, *Ibid.*, pp. 3, 4.
- (4) Carus-Wilson, *Ibid.*, 上述の注(1)の記述でも分かるごとく、十四・五世紀のエクセターを中心とした素描である。
- (5) Stephens, *Ibid.*, pp. 3, 4.

- (6) R. Pearse Chope, 'The Aulnager in Devon' in *Transactions of the Devonshire Association*, XIV, 1912, pp. 591-2., cited by Stephens, *Ibid.*, n. 1.
- (7) D. C. Coleman, *Industry in Tudor and Stuart England*, 1975, p. 27.
- (8) Hoskins, *Industry, Trade and People in Exeter 1688-1800*, 1935. History of Exeter and the South West Research Group VI. p. 12 n. 3 ここにおける Dunsford, *Historical Memoirs of Tiverton*. の著者に対する評価参照。
- (9) Hoskins, *Devon*, p. 124.
- (10) *Ibid.*, p. 125. カルムストックの一毛織物済を第4位というのは、バーンスタープルの3名に次ぐ意味である。
- (11) *Ibid.*, p. 125.
- (12) *Ibid.*, p. 126. *Industry, Trade and People*. p. 12.
- (13) Hoskins, *Devon*, p. 126.
- (14) 'Act to remedy the decay of corporate towns.' *Statutes of the Realm*, Vol. IV, p. 244. R. H. Tawney and E. Power ed., *Tudor Economic Documents*, Vol. 1. 1924, pp. 119-121. 浜林正夫, 篠塚信義, 鈴木亮編訳 原典イギリス経済史 御茶の水書房刊 133-5ページ。
- (15) 'An Act touching Weavers.' *Statutes of the Realm*, Vol. IV, pp. 286-7. *English Economic History Select Documents*, compiled and edited by A. E. Bland, P. A. Brown and R. H. Tawney, 1925. p. 320. 原典イギリス経済史 138-40ページ。
- (16) Hoskins, *Devon*. p. 126.
- (17) *Ibid.*, pp. 126-7.
- (18) *Ibid.*, p. 125.
- (19) *Ibid.*, p. 127.
- (20) Coleman, *Ibid.*, p. 30. Peter J. Bowden, *The Wool Trade in Tudor and Stuart England*. 1962, p. 53.
- (21) Hoskins, *Ibid.*, p. 127.
- (22) W. E. Minchinton, *The Growth of English Overseas Trade in the 17th and 18th Centuries*, 1969, p. 9. およびこの書に収録されている F. J. Fisher, 'London's Export Trade in the Early Seventeenth Century', p. 66 の Table I. フィッシャー著浅田実訳「一六・七世紀の英国経済」第3論文「一七世紀前半ロンドンの輸出貿易」表I, 102ページ, 未来社刊, 社会科学ゼミナール52.
- (23) Hoskins, *Ibid.*, p. 126.
- (24) *Ibid.*, p. 127.
- (25) Stephens, *Ibid.*, pp. 36, 39. 前項表13, 14参照。
- (26) *Ibid.*, p. 60.
- (27) *Ibid.*, p. 67, Table II.
- (28) *Ibid.*, p. 49.
- (29) *Ibid.*, p. 64. フランス・カンパニは革命期に急激に衰退し, 王政復古後1670年ころに消滅する。冒険商人組合の活動も急速に衰え, 王政復古後の「例えば, 1661年に6月21日ごろから9月29日の間, 自由なる商人が9,254反を送り出したのに, 冒険商人組合はエクセターから僅かに毛織物225反を輸出した」と言われる。Hoskins, *Industry, Trade and People in Exeter.*, p. 14. 周知のごとく, 冒険商人組合の独占権は1689年に廃止された。Minchinton, *Ibid.*, p. 12.
- (30) Stephens, *Ibid.*, p. 49.
- (31) *Ibid.*, p. 36.
- (32) *Ibid.*, p. 50.

- (33) *Ibid.*, pp. 68-9.
- (34) *Ibid.*, pp. 69-70.
- (35) *Ibid.*, p. 89. オランダの市場は完全に閉されたが、フランスとは実際に戦うことなく、イギリスの商品に対して高率の関税を課した。
- (36) *Ibid.*, p. 103. Table 17.
- (37) *Ibid.*, p. 91.
- (38) *Ibid.*, p. 105.
- (39) *Ibid.*, p. 90.
- (40) *Ibid.*, p. 96.
- (41) *Ibid.*, p. 104. Table 18.
- (42) *Ibid.*, p. 105. Table 19.
- (43) *Ibid.*, p. 108. ステューブンスはロンドンの商人がいつそう組織化されていたことに理由を求めているようである。だが、それだけでは理由が曖昧で、明らかではない。
- (44) *Ibid.*, p. 104.
- (45) *Ibid.*, p. 118.
- (46) *Ibid.*, p. 117.
- (47) *Ibid.*, pp. 119-20.
- (48) *Ibid.*, pp. 110-11.
- (49) *Ibid.*, pp. 117-8.
- (50) *Ibid.*, p. 118. Table 25.
- (51) *Ibid.*, p. 102.
- (52) *Ibid.*, p. 123.
- (53) *Ibid.*, p. 125.
- (54) *Ibid.*, p. 112.
- (55) Hoskins, *Ibid.*, p. 155. Appendix B (iii) (a) の中から抜粋作成。
- (56) Hoskins, *Devon*, p. 128. Stephens, *Ibid.*, p. 13.
- (57) Hoskins, *Ibid.*, p. 127.
- (58) Hoskins, *Industry, Trade and People.*, p. 29.

〔未完〕

(本稿は58年度文部省科学研究費の助成による成果の一部である。)